

## 田宮虎彦「足摺岬」論

— 〈生〉の選択 —

はじめに

「足摺岬」は、昭和二十四年十月に『人間』に発表された。<sup>①</sup> 四国の高知県に実在する足摺岬を舞台として書かれ、田宮虎彦の代表作となっている。

本作品は主人公「私」の〈生〉という問題を扱ったものと読み取った。そこで本論では、〈生〉と〈死〉のはざままで葛藤を繰り返し、最終的に「〈生〉を選択する」結論に至った「私」の心情を明らかにする。まず〈死〉を思い立った理由、次に〈死〉を思いとどまった理由を論じ、「私」が見出した考えを常に時代背景を踏まえながら考察していく。また、作者は、「鹿ヶ谷」「卯の花くたし」「比叡おろし」「絵本」「菊坂」「足摺岬」と続く連作と述べている。<sup>②</sup>

「足摺岬」を論じる時、前作品に触れることはその内容を理解する

上で必要と考えたため、本論文では「菊坂」も一部論ずる。

なお、記述にあたり作品名を「足摺岬」、地名を足摺岬、また漢字は新字体に改めた。

山 邊 泉

## 第一章 〈死〉の出現

## 第一節 母の死

本作品は、自殺しようと思いつめる「私」から始まる。「私」は〈死〉を決意したが、その理由は漠然としたものであり、本人も理解し得ない状態がここからうかがえる。そこで、次の部分を引用し心情を追求していく。

身体も弱かったし、金もなかった。父親とは憎みあっていた。母が死んだ直後であった。

しいて理由と言えば、母を追って死のうとしたのかもしれない。

だが、母の死んだ時、私は死ぬ決心をしたのではない。

(一六二頁)<sup>3)</sup>

第一に理由と考えるのは「母の死」である。「私」の母に対する想いなのだが、翌年発表された「菊坂」に詳しく表されているので、ここで触れなければならない。作者自身「絵本」「菊坂」「足摺岬」は東京の大学生になってからのことを書いた、と述べている。<sup>4)</sup>この三作品をつなげて一つの映画作品にされたこともあるが、作者としても一つの作品で発表しなかったのだ(しかし、病気がちで体力がなかったため分けられた)<sup>5)</sup>。この事実より「菊坂」には「足摺岬」の「私」が〈死〉を思い立つ前の状況が書かれていると言える。

そこで「菊坂」に触れておきたい。「私」は、ある日電報で母の死を知らされる。その後途方に暮れ日々を過ごす。

母は生きていくという思いは、そうした思い出の生活から断ち切られてしまっても、なお自分がその思い出につながっているという意識を支えてくれていた。そのつながりの意識だけが、或いは私の生きて行く力であったともいえたかもしれない<sup>6)</sup>のだ。

〈母が生きているという思い〉 ≡ 〈幸福な思い出につながっているという意識〉 ≡ 〈「私」の生きて行く力〉と図式的に考えたい。

「母の死」は〈生きて行く力〉の喪失につながりはしないか。「菊

坂」の「私」は「母が生きていると思っただうしていけないのか」と〈母が生きているという思い〉をかううじて持ち続け、〈生きて行く力〉にしていた。だが、その状態は続かない。「足摺岬」の「私」は父との憎み合いも加わり追い込まれている。

当時は封建的な家族制度が強かったため、「父親」の権力は家という組織の中では絶対的なものだった。「母の死」はその父親とのさらなる憎み合いを引き起こした。さらに、唯一の信頼できる人間を失ったことから生まれる虚無感により、「私」は人生に絶望したのである。

## 第二節 時代背景

「死」の出現」には時代背景も大きく影響している。「私」が青春時代を過ごしていた当時の日本の貧しさは、作品中随所に見取れる。

国自体が貧しければ、一個人の努力では改善され得ない。大学を卒業してもむなし人生しか残されてはいはしない、とは「私」自身の認識である。その大学も「やめれば数年の苦しみも無駄になるとわかって」いて、別の虚脱感が生まれるのだ。今までの努力が報われないという心理が背景にある。

また、「私」はこの時肋膜をわずらっていた。仕事がなくお金も

ないため、療養に必要な休息ができない。「自分の身体が残された人生に耐え得ぬことに気付かねばならなかった」のだ。

金もなく治る見込みもない病気に堪えてゆかねばならぬ私に絶望以外に何があったか。

この絶望は「死」という選択に辿り着いた。「日本が貧しい」  
 「仕事がない」  
 「お金がない」  
 「休息ができない」  
 「人生に堪え得ない」  
 「死」となる。

また、もう一度「菊坂」に戻ると、母の死を知らされたのは皇太子誕生の時だとわかる。日本国民が唯一盛り上がった時に喜べないつらさ、孤独感もあるだろう。なぜなら「私」が母を思い浮かべるとき、背景に周囲の皇太子誕生で湧き上がる様子が書かれているからだ。自分が不幸という認識は絶望へとつながる。

「足摺岬の「私」はこの思いを託されている。この時の絶望が「死」の出現となった。

## 第二章 足摺岬という場所の効果

### 第一節 その壮大さ

「私」が死に場所として足摺岬を選んだのは、その厳しさからであった。もちろんだが、落ちれば必ず死ぬ。それに加えて「投身者の姿を二度と海面に見せない」というように死体が上がらない。自

分が黒潮に巻き込まれてどこか知らぬ海の果てに押し流されて行く姿を心にいだきうかべるほど、「私」は「死」を強く意識していた。自分をこの世から完全に消してしまいたいという願望が、足摺岬へと向かわせたのだろう。

だが、実際に海を目の当たりにするとその心持は一転した。

思わず私は立ちすくんだ。幾十条もの白い波がしらの、身をよじらせながら絶壁にうちよせてくるその速さが、私が毎日みつけている青い色のついた夢の中の得たいの知れぬものの速さに似ていたのであった。立ちすくんだ私を、ちぎれとんだ古綿のような雨雲が殴りつけていた。もし、あの死のうと思いついた旅で私が自殺することが出来ていたとしたら、それは、その瞬間であつた筈だ。だが、私は怒濤の中に身を投げる代わりに、ぬれそぼつた身体を力なく後ずさりした。(二六九頁)

この日は荒れた天候で「私」がまさに望んでいた死に場所の光景がそこにあつた。しかし、壮大かつ激しい自然を目前にし、恐怖感と威圧感が押し寄せた。

「私」は死にたがっていたが、「死ぬ以外に自分を支えるものがない」という考えが根本にあつた。それは「死」への願望というより「生」からの逃亡であり、消去法のようなものである。つまり、生きるのが苦しいから嫌だという消極的な気持ちだったといわざ

るを得ない。海は毎日うなされてゐる悪夢に似ていた。夢だと知つていても堪えられず、その悪夢からいつも逃れようと焦つていた。苦しさから逃れたい一心だった「私」は悪夢へ身など投げられず、また逃げたのだ。

## 第二節 作者の仕掛け

その「海の激しさ」を表したのは作者のねらいではないか。

なぜなら、作者は実際に足摺岬を訪れず、本作品を書いてきたからである。つまり、作品の構成完成が先だったといえる。「足摺岬」と題したのは、作者が荒海を想像できたからであろう。「私」にとつて壮大な自然と思わせたのは作者の仕掛けである。自然の力に人間が圧倒される様子を読者に示したかったと考える。

足摺岬の激しさで「私」は一時（死）をとどまった。前節の結論の証拠はここにもある。

## 第三章 出会った人々の影響

### 第一節 お内儀の影響

「私」が（死）をとどまるのには、清水の宿の人々との触れ合いもある。

足摺岬へ行ったが死なずに戻ってきたときのことである。雨の中

を二里近くも歩き、「私」の体は冷えきつていた。そしてお内儀、菓売り、遍路に介抱される。この間、「私」はぼんやりし、頭がはつきりしない様子の記述が多く見られる。それは、肉体的疲労と同時に精神的脱力感があるからだ。（死）から一時離れたため脱力し、今後のことも考えられないでいた。

しかし、そのぼんやりしている時にはつきりと聞き取ったお内儀言葉がある。

やがてお内儀が私を見つめながら／＼「馬鹿なことはせんもんだね」／と言った。だが、その言葉には非難のかけはみじんもなかった。むしろいたわるような暖かい口調を私は聞きとつたように思う。

（二七〇～二七一頁）

「その言葉には非難のかけはみじんもなかった」と言い切り、「いたわるような暖かい口調」まで聞きとる。半分意識のない状態の時に、感情を受け取ることができた。これは、お内儀の存在の印象深さが強調されているのではないか。

お内儀と「私」は知り合つて間もない。まだ親しくもなっていないお内儀の「私」に対する態度・言葉には（無償の愛情）が含まれる。（無償の愛情）からは（母性）が連想できる。これは「私」が先日無くした感情なのだ。母親を亡くしてからは生きる希望が見えなくなっていた。しかし、その後初めて（母性）を感じ、（生）の

見直しを始めた。わずかではあるが（母性）の復活により（生きる力）が浮上した。ここで、〈死〉はやや陰を帯びてくるだろう。

## 第二節 薬売りの影響

行商の薬売りは無条件で「私」をいたわり、作品を通して「良い人」と表されている。「私」はそのような薬売りの（視線）をたびたび感じながら過ごす。

・薬売りは柔らかな眼差しでじっとくいているようにみつめた。（一七四頁）

・治ることをうたがってはならぬと説きさとしてゐる眼差しであつた。（一七四頁）

あつた。

・薬売りは最後にじっとみた。（一七九頁）

人間の心情は表情となり得る。（視線）は気持ちを伝えるのに大きな役割を果たす。薬売りの（視線）を意識している「私」は気持ちを意識している、と言える。薬売りは「私」を思いやる気持ちがあり、「私」はその気持ちを十分理解していた。メッセージの伝達は成功していたのである。

また、解きほぐされた「私」の心が書かれている場面がある。薬売りが宿毛の町へ立って行く日のことだ。「私」は作品中で初めて涙を意識する。虚脱した「私」は宿に来てから人に対してほとんど

反応を示さなかった（お内儀の呼びかけに答えないなど）。それほど心を閉ざした状態なのにもかかわらず、感情的になったということには特別な意味がある。

この時、「まだ死ぬことをあきらめていたわけではない」と述べている。けれども、このあたりから〈死〉に対する想いは〈意地〉も入っているだろう。涙を見せまいとしたのも〈意地〉から来ている。人前で泣く事により緊張が解れ、〈死〉が消滅するのを恐れたのだ。だが、〈意地〉は冷静になるにつれ、薄れてくるものである。薬売りは薬とともに、人間が弱い状況の時に染み入る優しさを与えてくれた。

## 第三節 八重の影響

「私」が宿に泊まっていた時、八重は世話をしてくれ、いつしか話相手になった。「私」は八重の清らかな何とない女らしさに惹かれていく。この頃から八重に対して愛情が芽生えたとと言えるだろう。お内儀や薬売りに対するものとは少し異なる（男女間の愛）だ。この恋愛感情は（生）への強い後押しとなった。「死とはまるでうらはらな生の営み」と表されているが、これは八重に対する想いなのである。

結婚した数年後に「あの時、八重は私を死から救ってくれた筈だ」

と告白していることから、八重への愛を確信したとき（死）への迷いを捨てることも確信した、と考えられる。

#### 第四節 遍路の影響

遍路も、前節まで述べてきたような「私」に対していたわりを与えてくれ、同時に（教え）もくれた。そこでその（教え）について考察していく。

ある日、遍路は「私」に己の秘めた話をした。遍路は戊辰の戦いで官軍に滅ぼされた奥路の小さな藩黒管の生き残りであるという。戦で妻と赤子を殺さざるを得ず、城も焼かれた。仇を討つつもりで二十年間逃げ回ったが、その願いは叶うことなかった。…などという悲劇的な自分の過去を一通り話した後、遍路は言葉をきる。

遍路はふつと言葉をきった。しばらく虚空を睨みつけるようにするどい眼をすえていたが、やがて、／「夢だ」／とひとことしゃがれた声でぼそんと言うつと、そのしゃがれ声を追いかけて、うつろな高笑いをかつかつと投げつけるようにつづけた。

（一八六頁）

「夢だ」現実を受け止めるには悲しすぎるため、遍路は自分の悲痛な過去を「夢」に置き換えている。この「夢」は（あきらめ）と違っていいだろう。

当時は絶対的な権力をもつ政府に少数で反発しても報われなかった。理不尽な世の中であるゆえ、あきらめることしかできなかった。一個人の運命は、時代の流れに押し流されるのみとなっていた。このような時代であったから遍路のような「夢」という考えが生まれるのかもしれない。

「私」はこの遍路の（教え）を受け取った。このとき、人々から愛情を注がれ心が開いていたといえよう。素直な気持ちだったからこそ、遍路の言葉に影響され得た。そして、いつしか死ぬことをやめていた。

この宿で培われた人間関係が「私」を（死）から救ったのである。

#### 第四章 戦後における（生）の位置

第一節 八重の死が意味するもの

足摺岬を後にして三年、「私」は再び清水の宿を訪ねて八重を東京に連れて帰った。しかし、まもなく戦争が激しくなりより苦しい生活となる。やがて八重は亡くなる。「私」の病が八重に移り死に至ったという。自分を（死）から救ってくれた人間を（死）へ追い込んでしまった皮肉な結果である。

「私が八重を殺したと言わなければならない」と思う。だが、客観的に考えると「私」だけの責任ではない。むしろ世の中こそが八

重を殺したといえる。戦争で貧窮を極めた国、病気にかかれば治せる見込みなどない。苦しい生活を送った結果、死に至ったのだから戦争の犠牲者とも言えよう。

「私」の心情を読み解くことにより、この時代の思想がうかがえる。庶民に罪はなくとも、苦しませられ、世の中の流れに逆らうことなどできない。一個人は政府を前にすると、あまりにも無力である。「私」の視点は、当時の一般庶民の代表的なものと考ええる。八重の死が意味するものは、人生における皮肉と矛盾だらけの世の中の存在である。

## 第二節 龍喜の苦悩による認識

龍喜は戦争中、特攻隊に借りだされていた。特攻隊は、第二次世界大戦末期、体当たりの攻撃を行った日本軍の特殊部隊であった。いわば国家のために死ぬことを強制されていた人たちである。龍喜も一度は死を覚悟したが生き残れた。本来なら喜ぶべきことなのだが、思わぬ苦悩がある。復員してからは一時も家に落ち着かず、銘酒屋に入り浸って町並みを荒らしまわっている。そして、龍喜は叫ぶ。

「誰のために俺は死にそこなったんだ、負けたもくそもあるか、俺はまだ負けておらんぞ、俺に死ねと言った奴は誰だ、俺は殺

してやる、俺に死ね死ねといった奴は、一人残らずぶったぎってやる」  
(一九二頁)

この叫びには、天皇制権力に対する批判が強く込められている。なぜなら、発表前「俺に死ね死ねと言った奴」は「天皇」とされていた。しかし、問題ではないかと後に変更された。確かに敗戦後とはいえ、天皇に「殺してやる」とは強烈すぎる。

戦争中は「死」が美德と言われ続けてきた。国家・天皇のために死ぬのは大変な榮譽ということだった。けれども敗戦し、国民は今までの価値観を壊される。この価値観の崩壊から生まれる虚脱感が龍喜の苦悩の原因と取れる。かつての「死」が美德」という典型的な考えがなくなり、今後は貧しい生活環境の中（生）を強制される。この時、国民にはとまどいやぼんやりした虚脱感があつただろう。さらに「敗戦」という形で幕を降ろされたのも龍喜に影響を及ぼした。命までささげたものが「負け」となれば、自分自身否定につながる。自身の存在が否定されれば生きる価値を見出せない。負けを認めぬように龍喜は叫ぶ。自身の肯定を求めている必死なものなのだ。

この叫びを聞くと、「私」は「夢だ」という遍路の言葉を思い出す。かつて自殺を思い立った自分と龍喜を重ね合わせたのだ。状況は違うものの、龍喜もまた虚脱感から始まる苦悩にさいなまれてい

る。そこで「教え」が頭をよぎり、今度は自分が龍喜に伝えようとしていた。「全てが夢だ、だからあきらめなさい」一見残酷なような。だが、「あきらめ」は消極的な意味だけではない。矛盾した世の中を「受け入れる」ことで新たに「生」の可能性を見出すのである。

また、「私」は自分も「生」を追求しなおしている。八重の死と龍喜の姿を受入、同時代における人間の「生」のあり方を再確認したのである。

## 第五章 「私」の変化

### 第一節 新たな「生」の定義

ここで「私」が清水の宿に来た頃、うなされ続けた悪夢について検討したい。悪夢は既に第二章で引用した「青い色のついた夢」である。

私はそれが夢であることを知っていた。(中略)そして眼のく  
らみそうな私に、それが夢だ、夢だと、私はおしえていた。夢  
だから堪えねばならぬ——私はそうわかっていながら、そんな  
苦しい夢から逃れようと焦っていた。のがれるためにはどうし  
ても眼ざめねばならぬのだった。その焦りもまた私にはよくわ  
かっているのだったが、目の前を独楽のように走りすぎる得た

いのしれぬものの影を、私は到底消すことが出来なかった。私  
はうなされている自分の声に、やがてようやくやく気づいて眼ざめ  
るのだったが、眼ざめきっている自信もなく、尚荒い吐息をく  
りかえていた。  
(一六五—一六六頁)

この「私が見ていた夢」は悪夢である。「私」は「生」が苦痛そ  
のものであった。見続けた悪夢は「生」の象徴だったとなる。そ  
のような悪夢は「夢だ」から「堪えねばならぬ」とわかっていたが、  
逃れようとした。

そこで眼ざめなければならないと思う。睡眠から覚醒への変化を  
求める。今ある状態を変化させ、苦痛からの逃亡を試みたのだ。「生」  
からの変化を求めれば「死」となる。「のがれるためには死ななけ  
ればならぬのだった」と言い換えられよう。

だが逆に言えるのは、逃れようとしなければ「死」とならないこ  
とである。「逃れない」つまり「受け入れる」ことができれば、生  
き続けられる。「私」は「死ぬことをいつしかあきらめていた」時  
逃げるだけだった「生」を現実を受け入れる「生」へと変えていた  
のである。



## 第二節 〈生〉の選択

では、何故〈生〉の定義を変え得たのか。

「私」のような一般庶民は社会に対すれば無力である。自分がいるのは理不尽な世の中であり、その流れに反発することなどできない。「私」について考えると、家庭における人間関係のありようにも共通したことがいえる。家父長制度によって、家庭には「父親」という絶対的な権力者が存在する。ここに「私」は社会からの圧力と同様のものを感じ取ったのだ。二重の圧力に押しつぶされていた。そこで〈死〉が出現する。〈死〉と〈生〉のはさまで繰り返し葛藤を断ち切らせたきつかけは、遍路の〈教え〉である。「私」は妄想・真実とは何かを自分で問い始め、堪える力の必要性を受け止めた。流れに対する一個人の力を認め「受け入れ」れば、〈生〉に変わると理解したのだ。

また、愛情の希求もあった。肉親である父親からは憎まれ、母親も亡くなったことにより愛情が消滅していた。けれども宿において、人間同士のいたわりあい・あたたかさを再三感じ、抜けた部分が補われた。だからこそ苦しみに堪える力も得たのである。本作品では愛情の必要性も述べられている。それは、父に愛されなかった事実と母に愛された事実、この二つが存在したからこそわかり得たのである。

「私」は「受け入れる」ことが可能になった。そして、最終的に〈生〉を選択したのである。

## おわりに

「私」は自分を〈死〉にまで追いつめたが、人生(夢)を受け入れられることによって新しい生き方を見出した。

現在から見ると、戦時下でいやおうなしに国家の進路方向に従わざるを得ない暗い時代、また、封建的な家族制度(家父長制)が強く残っていた——家族のきずなが強制されていた——という状況から生まれる青春の悩み、怒り、そしてあきらめなどはなかなか理解しにくいところである。

しかし、こうした葛藤が作者の青春時代にあったことは確かである。現在における家族や社会に対する若者のやり場のない怒り、不安と対比させると、その共通点は少ないように思われるが、〈死〉という観点から見ると、一部共通する点もなくはない。現代の社会派作品に通じる面もあるのだろう。

いずれにしても、本作品の主人公「私」は最終的に〈生〉を選択した。人間関係によって絶望の淵に立った人間が、一筋の生きる光明を見出したのはまた人間関係であったことに安堵感を覚える。

## 註

- (1) はぎわら、とくし作製「田宮虎彦年譜」伊藤整 亀井勝一郎 中村光夫 平野謙 山本健吉編集『日本現代文学全集102 井上靖・田宮虎彦集』昭和三十六年八月 講談社
- (2) 日本経済新聞 田宮虎彦「私の履歴書(7)」昭和六十年十一月七日
- (3) 本論文のテキストは全て「足摺岬」「田宮虎彦作品集 第三巻」昭和三十一年十一月 光文社。
- (4) 註(2)に同じ。
- (5) 平成十二年十月十六日 田宮虎彦氏長男・田宮兵衛氏にお茶の水女子大学にてインタビュー。
- (6) テキストは「菊坂」「田宮虎彦作品集 第三巻」昭和三十一年十一月 光文社。
- (7) 日本経済新聞 田宮虎彦「私の履歴書(27)」昭和六十年十一月二十七日

(二〇〇一年 卒業)